

# みんなでみんなを育てようの精神で

中村 万紀子

## はじめに

私の園で、それまでの保育参観を改め保育参加に切り替えたのは、今から十七、八年前のことになります。その当時、保育参加に限らず、保育のあらゆる面で意識改革がありました。環境構成においても、保育にかかる者の意識においても、クラスを超えて全保育者で全園児を見ていく気持ちを常に意識し、「みんなでみんなを」の精神で保育を開拓するように努めていきました。

そういう流れの中に保育参加も生まれました。保

護者が園の様子や子どもの様子を、月一回程度一斉に見に来る参観から、子どもと遊び、生活を共にする参加の方向へ切り替えました。その当時、もうすでに保育参加を実践しているという、ある幼稚園の取り組みを参考に、試行錯誤で始めていきました。それからずつと続いています。職員の誰も「やめよう」とは言いません。子どもたちも保護者も、次の保育参加を楽しみにしている様子も伺えます。きっといいことだから続いているのだと思いますし、意味があるようと考え、より良いものにしていきたいと願っています。

四年前に勇気をだして保護者を視点に入れ、「共に育つ—子どもと親と保育者と—」というテーマでの研究に取りかかりました。正直に言つて初めはおこがましい気持ちでした。しかし、保育・子育てには切り離せない保護者との信頼や家庭との連携について、保育参加を含めて、実践を丁寧に振り返るところから進めていきました。子育て支援に関する様々な取り組みが行われている中、私たちの園なりに確認できたことがあります。保護者が保育に入ることが、子どもの生活を豊かにするだけでなく、保護者の成長支援にもつながっていくことです。それを『もう一つの子育て支援 保護者サポートシステム』としてまとめました。ここではその一端を紹介します。

### 園での生活を体験する

保育参加では、実際に登園から降園まで保育に参加してもらい、子どもと一緒に遊んだり活動したりなど、からだを動かしながら、園での生活を体験し

てもらいます。全保護者を対象に、学期に一回ずつ行い、一日に参加する人数は一クラスに五人程度。ですから一回目の保育参加が終了するのに、一週間から十日間かかります。保護者が、やたらと頑張つて良いところを見せようとか、保護者をお客さんつかいにすると、不自然な保育となり、負担になります。普段の保育のありのままの姿や貴重な子どもの生活であることを大切にし、その中に参加してもらいます。一緒に保育する者同士として受けとめています。

また、初めての保育参加の前には、オリエンテーションをします。保護者にとつては知らない保育の世界へ入っていくのは不安もあります。どう動いてよいか戸惑うこともあります。園生活の流れや子どもへのかかわり方、心積もりなどを事前に伝えておくことで入り易くなったり、具体的な遊びの様子を伝えることで楽しみにしたりするようです。「保育参加ガイド」という手引書を配布して説明をしますが、共に育てていきながら、疑問に感じたことなど

を一人で抱え込まずに、担任に聞いたり相談したりすると良いことなどを話します。

誰ともかかわらずに一人かと思つていたら、そんなことはなく、友達の様子を見たり聞いたり、ちょこちよこかかわつたりしてて安心した。

（四歳児の母）  
保護者は、園での実際の生活に触れ、いろいろな

子どもの様子や子どもの世界の不思議さや楽しさ、保育の様子などを見たり、感じたり、知つたりする中で、安心したり、納得したり、保育の大変さや難しさを感じたりします。また、三回目の保育参加の頃になると、一年を振り返り、わが子だけでなく子どもたちそれぞれの成長を喜ぶ姿も見られます。

保護者の感想から その①

（四歳児の母）  
◇毎日、色水を作つては大事に持つて帰るので、またかと思つていたが、実際に作つてゐるのを見て、こんなふうに一生懸命やつてゐるから大事なんだなと納得し気持ちがわかつた。

（三歳児の母）  
◇今まで「お母さん遊ぼう」とくつついて離れなかつたけれど、もう友達の方が良くなつたのか、離れてよく遊んでいた。できないことをすぐ「やつて」と言つてゐたが、今回は一生懸命自分でやろうとする姿が印象的だつた。

### ミーティングで話し合う

保育参加終了後、一時間程度、その日参加された方と担任とでミーティングをします。それの方が見たこと感じたことを担任が引き出しながら、話し合いが進んでいきます。話題は気になつたこと、

◇喜んで登園してはいるけれど、どんなふうに過ごしているのだろう？ 子どもの話を聞いてもピンとこなかつた。実際に遊んで様子を見ることができ、こうやって過ごしてはいるのかと、何となくだが安心した。

（三歳児の母）

◇園のことは何も話さないし、「だれと遊んだ？」と聞くと「一人で遊んだ」って答えるので、本当に

困った場面、発見したこと、楽しかった場面などいろいろです。具体的な出来事での話し合いを通じて、子どもの内面にある気持ちや要求の受けとめ方、友達の存在などを考えていく場面にしています。

あるお母さんの心配事を聞いて、「うちもそうよ」「そんな時もあつたわ」など話が進みます。自分だけではないことを知り、気が楽になつたり、先輩保護者の経験談に少し元気をもらい、自分の育児を振り返ることになつたりもします。

真剣に話を聞き、素直に思いを伝え、心を通わせることを大切にし、保育者と保護者、保護者同士のつながりができるよう願っています。

### 保護者の成長が見えてくる

初めての保育参加から回を重ねていき、学年が進むにつれて、ミーティングでの話題や話し方が変化していることに気づきました。一心同体のように我が子のことで一杯だった見方が、場面の流れや展開を話すようになり、他の多くの子どもの様子に目が

届き、子どもの見方が多面的になります。

全体のことや、大きな視野での子どもの成長が見えるようになつてきます。わが子を取り巻く子どもたち

の一人ひとりがかわいいと思えた

り、どの子も大切な存在だと思えたりしてくると、その子に応じた対応をしようとして、子ども集団に応じたかかわりができるようになつてきます。そして年長組になると、クラスの子どもたちを親全体が支えていくような関係へと展開し、力を發揮していくようになつていきます。

### 保護者の感想から その②

◇初めの子の時は、我が子の遊ぶ姿を冷静に受け止められず、友達の言いなりになりがちな姿に歯がゆい思いをすることがあったが、年中、年長と友達の中で少しずつたくましく育っていくこともわかつてきた。今回二番目の子の保育参加では、わが子にも



周りの子にも、同じ気持ちで楽しみながらかかわったように思う。そんな自分に気づいた時、親として少し成長したのかな…と思う。

（第一三子の母）  
◇子どもを否定するのではなく、受け入れてあげよう、いいところをたくさん見て、認めてあげようと思えるようになった。

（四歳児の母）

◇園での最後の参加となり、小学校入学を控え、本当に成長した子どもたちにうれしい驚きを感じた。我が子だけでなく、みんな我が子の気持ちが実感でききた。

（五歳児の母）

### おわりに

保育参加を通じて、子どもと保護者、保育者も一

緒に育ち合う関係が創られていきます。私たちも親御さんの切なる思いを親身になつて聞くことはどういふことか、教えるのでなく、伝え理解してもらうことがあります。

（山口大学教育学部附属幼稚園）

年長組になつた保護者は、子どもたちのことが良

### 参考文献

友定啓子・山口大学教育学部附属幼稚園著『もう一つの子育て支援 保護者サポートシステム』フレーベル館

二〇〇四年

くわかり、みんなの顔が見えて、どの子にも声をかけることができ、また手伝えることがあれば力になります。そこで年長組では、保育アシスタンントに移行し、よりダイナミックな活動に参加して、グループで動いたり協力したりするところなどを支えてもらいます。そうした中で、役に立つ喜びや共に達成感を味わい、自己実現の場にもなっています。子どもたちにとつても、自分の親が、自分たちのため、みんなのためにと、汗を流し活躍している姿をうれしく誇らしく受けとめていくことだと思います。

『みんなでみんなを』の精神を大切に受け継ぎ、つなないでいきたいと思います。